

西光寺だより

第一一八号 令和二年 六月一日発行

夏のはじめ、また梅雨の時期でもある六月となりました。

新型コロナウイルスの感染が日本全国に広がり、感染者数も減ってはいるものの、依然としてその終息はまだ見えません。今回のコロナ禍の特色は、限られた地域だけでなく、全世界が脅威にさらされ、地球上すべての人々の共有の問題となっています。感染拡大防止のために、世界中で、今までとは違った新しい日常が求められています。

それまでが当たり前だと思っていた日常を失って、初めてそれが当たり前ではなかったと気付かされたことであります。

当たり前の反対語は、「ありがとう」（有り難う）といわれます。有り難いという心は、それが当たり前ではないことだと気付くことで起こってくる。

コロナ禍が、これまでであった「当たり前前」の日常が有り難いと気付かせてくれたと受け取ることもできます。

この経験をご縁とし、日々の有り難さの上に成り立っていたということを感じながら、改めて日常を思うことであります。

『コロナ禍』という言葉がテレビや新聞で見られる機会があります。これは『コロナか』といい、「コロナウイルスに由来するわざわい」を意味する言葉であります。また『禍』は「わざわい」ともいい、同じ読み方の災いと意味の上での使い分けがあります。

- ・ 災い・・・主に天災など防ぎようのない元凶によりもたらされるもの
- ・ 禍・・・主に人為的ミスなどにより発生した凶事に使われる

新型コロナウイルスに由来する凶事に『禍』の字がつくのは、「これ以上感染を広げない」という重要ポイントが、個々人の行動にかかっている、という点にあるそうです。

個々人が予防しながら、協力しながら乗り切っていきましょう。

◆先月の報告◆

五月二十一日（木）京都西本願寺で親鸞聖人のご誕生をお祝いする宗祖降誕会法要が厳修され、お勤めのみのご法要でありました。

そしてこの度本願寺ご門主様より、いのちのつながりの中で生きる、と題してお言葉がありましたので、一部抜粋し載せさせていただきます。

「仏教では、この世界と私たちのありのままの姿を「諸行無常」と「縁起」という言葉で表現します。新型コロナウイルス感染症という新たな病気に直面する社会において、仏教の説く真実は私たちの心に届き、これからの生き方を示しています。私たちは感染拡大前の社会や生活に完全に戻ることはできないかもしれませんが、すべての人びとはお互いに関わり合い、大切ないのちのつながりの中で生きていますから、『誰一人取り残さない』という理念を持ち、これからも仏教や浄土真宗のみ教えを伝えるお寺が人びとの依りどころとなるよう、社会の中でできることを実践してまいります。」



●今月のことば●

朝がくると

まど・みちお

朝がくると とび起きて

ぼくが作ったものでもない

水道で 顔をあらうと

ぼくが作ったものでもない

洋服を きて

ぼくが作ったものでもない

ごはんを むしゃむしゃたべる

それから ぼくが作ったものでもない

本やノートを

ぼくが作ったものでもない

ランドセルに つめて

せなかに しょって

さて ぼくが作ったものでもない

靴を はくと

たったか たったか でかけていく

ぼくが作ったものでもない

道路を

ぼくが作ったものでもない

学校へと

ああ なんのために

いまに おとなになつたら

ぼくだって ぼくたって

なにかを 作ることが

できるように なるために

前回にも載せさせて頂きました、まどみちおさんの詩。たくさんの詩の中にこの『朝がくると』という詩があります。

毎日の生活、顔を洗い・洋服を着て・ご飯を食べて・本やノートをランドセルにいれて・靴をはいて・学校に行く。当たり前の出来事が「ぼくが作ったものでもない」という視点から見ると、全く違う世界が見えてきます。

当たり前にあるものが、目には見えないさまざまな力によってあるのだと感じることです。お釈迦様の説かれた縁起である、あらゆるものは関わり合って存在している。そう思うと多くのおかげ様の中に生きているのだと実感することです。

この詩をとおして、当たり前前ではないことに気付くことで起こる「ありがとう」のことば。

改めてわかりやすく伝えて頂いた思いであります。

そして、今のこの時期、ぼくが作ったものでもない学校に、ありがとうの感謝の思いで元気に登校できる当たり前でない日常を、願うばかりであります。

合掌

《浄土真宗本願寺派 天真寺より》



浄土真宗本願寺派 白毫山 西光寺

大阪府茨木市西河原一―七―二

電話 〇七二―六二二―四七九四

FAX 〇七二―六二二―九二九一

<http://www.osaka-saikouji.net/>